自主講座を提起する！

過去の日大における授業は、一番いかなるものであったか、それは、我々学生が管理体制に組み込まれ、単に一個の商品として社会に送り出される為の過程にすぎなかった。そして我々自身、大学を就職の為の予備校的存在としてとらえ、教員も又、個人の研究にのみ重きを置き、アルバイト的に学生を教えるか、又は現在の自分の立場、権威、金の流れとの接点を守ることにのみ終始し、真の研究者とは、教育者とは、etc の根本的問題を考えず、教員が教育とは何かを考えず、大学とは何かという問題を考えようとしなかったのか。

それはまさしく、1968年日大改革案に見られるごとく、日大が国策に対たうべき大学として、何も考えない、かつないい学生を社会に送り出す一方で大きな利潤追求の株式会社として改編して行くという方向にあり、その為機構が整備され、日本精神に代表されるような思想統一がされていたからに他ならない。

このような様々の機構の一つとして、学生弾圧の為の指導委員制、体育会、学則31条etc があり、教授―講師―助手―副手―学生といった教育主従機構が敷れていた。このような中で我々は単に与えられる知識を吸収する以上を望まない、又望まない者に仕立てられていた。1968年日大闘争は、このような管理体制に対する反逆であり、学生、教職員の一人一人が今までの自分自身に対して判決を下すべき問題提起であった。そして、それは体制の協力者としてあった今までの自分を否定し、自己批判する中で、では、真の学問とは何か、大学とはなにか、学生とは、教員とは、学生と教員の関係とは、といった問題を根本から考え、やり直すべきであるだろう。今迄体制に組込まれていた自分を否定し、真の学問を与えるものである。この講座においては、いかなる講師を招こうとも、それは、教える者と教えられる者の立場ではない。共に学び、共に討論を重ねる、対等の立場があればこそ、古い体制を脱却した現代に学問とは何かを語ることが出来るのである。

理工学部物理学科斗争委員会

[illegible]